

## 『薄雪物語』と『新薄雪物語』

菊池真一

### はじめに

『薄雪物語』については、従来、娯楽性・実用性・啓蒙性と  
いった諸性格が指摘されてきた。たとえば、松原秀江氏の次の  
文は有名なものである。

娯乐的・実用的・啓蒙的要素をかねそなえた仮名草子中の  
仮名草子だ、といつてよいであらう。<sup>(1)</sup>

確かに、そのような読み方をされてきたことは間違ひなからう。  
だが、いかに読まれたかということとは別に、作品そのものの  
本質を考えることも無意味ではなからう。娯楽性・実用性・啓  
蒙性を兼ね備えた仮名草子は、『薄雪物語』に限ったものでは  
ない。従つて、これらの性質の併存を説くだけでは、『薄雪物

語』の本質に迫ることは難しいと言わざるを得ない。また、そ  
れらの性質が本当に『薄雪物語』を評するに適切なものである  
かどうかについても再考の余地があると思う。

本論は、『薄雪物語』とその約一世紀後の改作である『新薄  
雪物語』とを比較し、『薄雪物語』の変質の意味を探るととも  
に、それを通じて両書の本質を考察しようとするものである。

### 一 筋の展開

両書を、大きく、筋の展開、往復書筋の二点に分けて比較考  
察する。

『薄雪物語』の粗筋は、次の如くまとめられる。

深草に住む園部の衛門は、清水寺参詣の折に薄雪を見初め、しばしば手紙を送る。だが、薄雪は人妻であり、その都度頭な衛門の求愛を拒否する。しかし、執念が突ったか、衛門の思いは遂に叶い、逢瀬を遂げる。一年ほど忍び逢った後のある時、衛門は志賀へ旅立つ。その間に薄雪は病気に罹り、死亡してしまふ。都へ知りこれを知った衛門は、一時は跡を追おうとするが、結局出家し、薄雪の菩提を弔う。

『新薄雪物語』では、衛門が右衛門となるが、概ねの筋立ては、右に掲げた所とさほど変わらない。ただし、『薄雪物語』が細部の設定にはあまり頓着しないのに対し、『新薄雪物語』は隅々にまで気を配り、十分説明的であつて、結構の面での不備をより少なくしていると言へる。たとえば、『薄雪物語』では、それまで強硬に衛門の求愛を拒絶してきた薄雪が、急に、「谷蔭のうす雪、このよのうちはなるまじく」と謎に託して諾意を告げてしまふ。どうして許す氣になつたのか、その辺の説明がなされていない。『新薄雪物語』では、『薄雪物語』で人妻であつた薄雪を後家とすることにより、この点を合理的に説明つけている。『新薄雪物語』巻二・巻三は、全て書簡の往復である。この間、薄雪は拒否の姿勢を貫く。だが、実は、薄雪は右衛門

の情熱にほだされていたのだった。事情は、巻四に至つて明かされる。亡夫の遺言は、「この身はまよひのかりものなればいかなるかたへもゑんにつきて身はおつとにまかすべし」というものであつたが、薄雪はせめて三回忌までは操を守つていたのである。七月十八日夫他界。翌年三月、右衛門との手紙のやりとりが始まる。足かけ二年これが続き、夫の三回忌を迎える。そして七月二十三日、薄雪は右衛門と逢う。三回忌という設定は『浄瑠璃十二段草子』をヒントにしたものであろうが、薄雪を後家とし、三回忌という趣向を構え、年月日をはつきりさせることによつて、『新薄雪物語』は『薄雪物語』の曖昧さ・不合理性を払拭している。『薄雪物語』の細部については、その他幾つか曖昧な点が見られる。逐一例を挙げるのは省略するが、このように、筋展開の細部において、『薄雪物語』の曖昧さと『新薄雪物語』の周到さとの対照は際立っている。

これを逆に言えば、『薄雪物語』にとつて、この中世風の恋物語という設定は、単に設定でありさえすればよく、それ以上のものではない、ということであろう。『薄雪物語』は、それほど細部に無頓着である。従つて、『薄雪物語』の結構の不備をあげつらつたり、細部の説明不足に疑問を投げかけたりするのは、本質的な事柄とは言い難い。『薄雪物語』の中心は、そ

のストーリー性・ストーリー展開にはなく、その間に挿まれた多くの往復書簡にあると言うことができるであろう。

## 二 往復書簡の啓蒙性

では、往復書簡の何が『薄雪物語』にとって重要なのであるか。

『薄雪物語』の二十五通の書簡に、啓蒙性・実用性を見る考え方がある。これについて、『新薄雪物語』と比較しながら考察してみたい。

啓蒙性というのは、往來物的性格、即ち、書簡中に様々な説話が記載されていることから言われるのであろう。そこで、両書に共通する説話を検討してみる。断片的なもの、極度に簡約化されたものを除き、『薄雪物語』には十二、『新薄雪物語』には十一の説話が見られる。(書簡中のものに限る)うち、両者はほぼ共通する素材を扱っているものが五話ある。志賀寺上人説話・小宰相説話・高師直(まさきの前)説話・千手の前説話・横山殿(御台所・稚児)説話がそれである。

一番目立つ相違は、志賀寺上人説話が、『薄雪物語』では薄雪方の手紙に引かれているのに、『新薄雪物語』では右衛門方

の手紙に出てくることである。内容を見ても、記述の精粗の差は措くとして、『薄雪物語』では、上人が京極御息所の手をとって、「いざさらばまことの道のしるべしてわれをいざなへゆらく玉の緒」の歌を詠むが、『新薄雪物語』では、上人の詠む歌は、「初春の子日のけふの玉ばふき手にとるからにゆらく玉のを」であり、御息所の返歌が、「いざさらば誠の道のじるべして我をいざなへゆらく玉のを」である点が異なっている。この話は、歌学書を中心として多くの書物に見られるものだが、『薄雪物語』のように記述するものは見当たらない。これに対して、『新薄雪物語』の記述は正統的である。散文の箇所は『太平記』巻三十七に則って詳細であり、歌と詠み手の組み合せも、この話を載せる他の書物に同じい。『薄雪物語』の薄雪は、上人は御息所の手を取るだけで満足したのだから、貴方も私の手紙だけで満足して下さい、と言いたいのであろう。それならば、上人の歌を「初春の」から「いざさらば」に変えなければならぬ別格の理由はない。この説話から、思いつめればその心は必ず通じるものだ、情は人のためならず、という二つの結論を引き出す、『新薄雪物語』の右衛門の論理の方が、より自然だと言えよう。『薄雪物語』のこの説話を記述する態度は、いささか恣意的、かつ強引という感を免れない。

次に、小宰相説話を見る。これは両書ともに男の側の手紙に見られる。『新薄雪物語』は、『平家物語』巻九の記述に忠実である。小宰相への手紙を度々戻されていた通盛が、最後のつもりで手紙を書き、「我恋はほそたに川の丸木ばし文かへされてぬる、袖かな」の歌を添えて送る。小宰相はこれを御所で落としてしまう。聞き見た女院が感じて、「たゞたのめほそ谷川の丸木ばしふみかへしてはおちざらめやは」と歌を返し、小宰相を通盛に下された。以上のような筋である。ところが、『薄雪物語』は女院を全く登場させず、小宰相自らがあわれと思ひ、「たゞたのめ」の歌を返してなびいたとしている。松原秀江氏が言われるように、「小宰相は恋のあわれを知る情ある女として、あらたに創り変えられている」のである。では、何故そのような改変を行ったのか。『薄雪物語』の衛門は、女院という媒介を通じた間接的な恋の成立には満足できなかったためであろう。原話を男と女の一对一の関係に変貌させ、薄雪の主体性に期待したのである。これも、やや強引なやり方と言わざるを得ない。

高師直と塩治判官の妻との話は、記述の精粗の差、細かな表現の相違を別として、両書共に『太平記』巻三十一によっており、大筋において同様のものである。ただ、『薄雪物語』がこ

れを高師直説話として捉え、『新薄雪物語』はまさきの前説話として捉える点で異なる。これはちよつとした観点の相違とも言うべきであらうか。

千手の前説話はどうであらう。松原氏によれば、『薄雪物語』の記述は次の如くである。

平家物語諸本に見られる千手と重衡の朗詠や今様・白拍子などの応酬を、引用文ではすっかり省略してしまい、ありもしない「琴の音に云々」の歌や、「真実の御なさけもなかりける」「かけぬなさけの中々に、なるるぞうらみ成とかや」等々の言辭をそへて、重衡の斬られた後の千手のありようをも、次のように述べる。

千手聞きつたへて

あつさ弓いるかひなしやいまははや二世のためにはそりてかへらん

とよみて、十六にて髪をおろし、二たび夫の肌をふれずと申候まま、まことに一夜のなさけをもかけず、御言葉申（し）なれたるばかりにて、賢女はかくのごとく。

と。ここに見られる歌も、傍点の部分も、引用文にのみ見られる独特のものである。移り変わるこの世のあはれを華やかに語る平家物語とは異り、薄雪物語の千手の説話では、

千手の前が、「情第一の女」として、しかも貞女・賢女として作り変えられ、そのことがこの話の主題になっている、といえよう。<sup>(5)</sup>

『新薄雪物語』は、『平家物語』をも参照してはいるものの、ほぼ『薄雪物語』に倣った記述である。和歌の違い以外に目立った相違点は見出せない。これは、貞女・賢女という作り変えが、『新薄雪物語』の作者と思われる柳心坊蘭溪の意に叶ったものだったからであろう。

もう一話、両書に共通するものとして、横山殿・御台所・叡山の稚児の三角関係がある。後二者の密会が横山殿に見つかるもの許されるという話だが、その際に詠む歌と詠み手の順番が異なるくらいであり、出典も不明なので、コメントは控える。以上、五つの説話について両書の記述を比較してみた。概して、『薄雪物語』は、典雅とする説話の記述を簡略化する中で、強引かつ恣意的にその話や和歌などを変えてしまう傾向がある。『新薄雪物語』にはないが、木曾義仲と巴御前との話も、松原氏によって、

巴の話にしても、平家物語では、最後の近い義仲への情愛や、それに答えようとする巴の女だてらの武勇が語られるが、引用文では、義仲の場合は同じながら、巴はその貞女

ぶりが強調されているのである。<sup>(6)</sup>

と評されており、全般的に、手紙差出人の都合に合わせて改変する傾向が強い。これに対し、『新薄雪物語』は、一般的に典雅に忠実で記述も詳しい。もとより、『薄雪物語』所載の説話が、全てこのように恣意的に記述されている訳ではない。しかし、そういう類の話が、一体何のために改変を加えられねばならなかったのかと考えると、その時その時の御都合主義というものを想定せざるを得ない。手紙差出人の主張に合うように、また、それを裏付けることができるように、話を変えているのである。

そもそも、啓蒙とは、辞書によれば、「一般の人々の無知をきりひらき、正しい知識を与えること」である。すると、『薄雪物語』の記述は必ずしも伝統に忠実ではないのだから、そこに正確な意味での啓蒙的姿勢を見ることは、正当な評価とは言えないであろう。啓蒙性とは、むしろ『新薄雪物語』について発せられるべき言葉のようである。同書では、往復書簡に終始する巻二・巻三以外にも各巻に教訓説話を採り入れ、女訓書・賢女鑑としての性格をも充実させているのである。『薄雪物語』が「賢女鑑」として読まれていたことのあるのも事実である。しかし、どう読まれたかということと作品そのものの本質とは

また別物であろう。また、ほぼ一世紀を隔てた両書の時代の啓蒙の質の差ということも考えられない訳ではない。しかし、『薄雪物語』の記述は、それだけでは片付けられないもののように思う。

### 三 往復書簡の実用性

『薄雪物語』に載せられた様々の書簡が、往來物的に艶書文範として読まれたというのも、しばしば指摘されてきたことである。『諸国心中女』『咲分五人娘』『風流色芝居』『兼好法師一代記』等の記述からすれば、艶書文範として読まれていたことは確かであろう。だが、前項の啓蒙性の問題と同様、ある時代の読者達の読み方と作品の本質とは、必ずしも同一であるとは限らない。『薄雪物語』を読めば、市古貞次氏の言われるように、「それが実際に贈答せられた艶書そのままのものとは容易に受けとれない」し、艶書文範ということについても、同じく「作者自身明らかにその意図を自覚していたかどうかは疑わしい」のである。それに比べ、『新薄雪物語』は、『薄雪物語』の書簡を艶書文範として解釈する時代風潮に乗って、艶書としての現実性を増幅し、散らし書きまで載せて実用に供したのであ

った。即ち、巻一の十八ウ・十九オ、巻四の十ウ・十一オ、巻五の九ウ・十オの各見開き画面等に薄雪方の手紙を散らし書きで示し、女筆の手本としたのである。

このように考えてくると、恋愛譚としての娯楽性、説話を引用するという啓蒙性、艶書文範としての実用性のいずれを取つても、『薄雪物語』は不徹底であり、これらの性格は、むしろ『新薄雪物語』の方にこそ、より濃厚に見られると言ふべきであろう。渡辺守邦氏も、『薄雪物語』について、

ただし、題材、表現等からしてお伽草子の影響を完全に脱し切つてはいない、仮名草子としての特色も十分には備えていない過渡的な作品あるいは新しい小説の萌芽として評価することはできるであろう。<sup>(9)</sup>

と評しておられる。では、『薄雪物語』の特質は奈辺にあるのだろうか。結論を急ぐ前に、もう一点について『薄雪物語』と『新薄雪物語』の性格を比較してみたい。それは和歌である。

### 四 和歌

『新薄雪物語』跋文の最初には、次のようにある。

「おりふしの面白きころ所からなとに邪心の歌をよまんよ

りはときにあひたる古歌を吟したるはおかしき。」と俊成卿のことは便りとし、むかしのうす雪ものかたりを八代集の歌にて作りかへ新うすゆきとなつけ

これを見れば、『新薄雪物語』創作の最大の意図が和歌の入れ替えにあったことが理解できる。所収歌数は、『薄雪物語』九十九首に対し、『新薄雪物語』百七十首。(共に全歌形を示すものに限る)両者に共通するのは四百のみである。『薄雪物語』の和歌のうち、先行文献にその所在を認められるものは、今迄の所、全体の半数強。勅撰集からの引用は五首のみである。対して、『新薄雪物語』は、先行文献に同歌形を見出すことのできるものが、現在の所、百五十六首、全体の九割を越える。同じ歌でも『太平記』『撰集抄』等によったと思われるものを除き、勅撰集に載る歌は百十五首、全体の七割弱に当る。(勅撰集の刊本から直接引いたかどうかは今問題としない)『新薄雪物語』は、勅撰集を重視し、古典的・伝統的であるが、『薄雪物語』は創作臭が強くて先行文献にその存在を見出せる和歌が少なく、しかもその過半はお伽草子類によっている。ここに両者の好対照が見られる。

『薄雪物語』には、「ひとつをもちどりといへる鳥あれば三つありとてもてふはてふなり」「あさましや男おとこはわろし能あたはな

し人にすぐれてすりきりはして」「行ゆくときはまたもあふみと思おもひしがいまからさきは君きみにあはづか」のように、狂歌めいた歌が見られる。道命の二十一首に及ぶ数え歌も、知的興味の強いものである。『新薄雪物語』にも、「意こころこそ心まよはず意いなれ意いに心こころゆるすな」の如き道歌めいた歌があるにはあるが、『薄雪物語』と比べると、多分に情趣的であり、遙かに優雅な世界を形成している。

## 五 『薄雪物語』の本質

今迄、『薄雪物語』『新薄雪物語』両書について、ストーリーの娯楽性、往復書簡の啓蒙性・実用性を検討し、『薄雪物語』についてよく言われるそれらの性質が、決して本質的なものではないことを検討してきた。それを踏まえて、『薄雪物語』の本質を考察してみる。

『薄雪物語』にあって、中世風の恋物語という筋の展開は、ただ設定としてのみありさえすればよく、主眼とする所は、むしろ往復書簡の方であった。だが、往復書簡について従来指摘されてきた啓蒙性・実用性もそれほど徹底したのではなく、その本質とは言い難い。では、『薄雪物語』の『薄雪物語』た

る所以は何なのか。結論を先取りしてしまえば、それは、手紙のやりとりを執拗に繰り返す趣向の案出と、そのやりとりを支える遊戯精神であろうと思う。

手紙に取り込んだ説話が啓蒙に徹しないのもその遊戯性ゆえであろうし、手紙がそのまま実用に向かないのも同じ事情からである。和歌に知性の勝ったものが目立つのも作者の遊戯的態度の反映であり、薄雪と衝門のやりとりは深刻さが一向に見られないのもそれと同じことであろう。『薄雪物語』の言語遊戯については藤樹和美氏の分析があるが、様々な謎・隠語の類もその遊戯性を証するものであろう。

鈴木亨氏によれば、『薄雪物語』は、「殆ど『恨の介』のパロディと見なし得るほどのものであり、」できるだけ陽気な雰囲気を狙って「おり、「情緒の鬱絆から解放された知性の躍動」が見られるという。今迄の考察の結果は、鈴木氏のこの御指摘と同じ点に帰着する。

## 六 『新薄雪物語』の意義

『新薄雪物語』の特徴は、『薄雪物語』との対比から容易に導き出されるであろう。筋の展開については、大まかな『薄雪

物語』とは対照的に細部にまで注意を払い、全体的に整った合理的なものになっている。物語としてより完成された形になっていることは言うまでもない。説話を質・量ともに充実させ、勅撰集の和歌を多く採り入れて、啓蒙性という点で『薄雪物語』よりはるかに徹底している。艶書に散らし書きを配するなど、実用性という点でも『薄雪物語』より勝っている。更に、『新薄雪物語』には賢女鑑としての教訓的性格も濃厚である。市古貞次氏の御指摘の如く、『薄雪物語』出て後、「純然たる艶書の集成に心がけたものと、薄雪の筋を逐うて幾分かの艶書をも加えて作った小説との二つが、いいかえると実用の方面に赴くものと娯乐的・小説的方面に更に発展するものとの二つが現れた」のであった。『薄雪物語』より約一世紀の後に現れた『新薄雪物語』は、これら二つの潮流を再び統合し、『薄雪物語』を増補・改訂するという形で、『薄雪物語』によって決定づけられた艶書小説の形式・内容をより充実させたものであると言えよう。

### まとめ

本論では、『薄雪物語』と『新薄雪物語』とを比較すること



によって、両書の本質を明らかにしようとした。『薄雪物語』についての結論は、『恨の介』との比較研究による鈴木亨氏や、その表現技巧から考察する藤樹和美氏の御意見に近いものとなった。私としては、従来行われてきた、娯楽性・啓蒙性・実用性という諸性格の指摘ということに対して疑問を呈する点に力を入れたつもりである。『新薄雪物語』は、従来『薄雪物語』の亜流という形で余り顧みられなかったが、『薄雪物語』をより完成させたという点で意義を見出すべきかと思う。

注

- (1) 松原秀江氏「薄雪物語板本考」(『近世文芸』27・28号。昭和五十二年五月)
- (2) 『薄雪物語』の本文引用は、野田寿雄校注、日本古典全書「仮名草子集上」(昭和三十五年三月。朝日新聞社)による。
- (3) 『新薄雪物語』の本文引用は、菊池真一校訂「新うす雪物語」(昭和五十五年九月。私家版)による。
- (4) 松原秀江氏「薄雪物語とものあはれ」(『語文』第三十五輯。昭和五十四年六月)
- (5)(6) 注(4)に同じ。
- (7) 『日本国語大辞典』(小学館)による。
- (8) 市古貞次氏「艶書小説の考察」(『国語と国文学』昭和十二年一月号)。後、『中世小説とその周辺』(昭和五十六年十一月。東京大学出版会)所収。

(9) 渡辺守邦氏「薄雪物語とお伽草子」(『近世文芸』22号。昭和四十八年七月)

(10) 藤樹和美氏「薄雪物語の表現技巧―その人気を支えた言語遊戯について―」(『松村博司先生国語国文学論集』所収。昭和五十四年十一月。笠間書院)

(11) 鈴木亨氏「恨の介」と『薄雪物語』(『島根大学文理学部紀要文学科編』第十一号。昭和五十二年十二月)

(12) 注(8)に同じ。